

十たび歌よみに与ふる書

連載第十回（最終回）

正岡子規

先輩崇拜ということはどの社会にもあります。それも年長者に対し、元勳に対し、相当の敬礼を尽くすという意味ならば至当のことですが、そうではなく、よく内容を知らずにその人の力量技術だけを崇拜するというのは、愚かの至りというものです。田舎の人たちは御歌所といえは、歌人の集まり、御歌所長といえは天下第一の歌よみのように考え、その人の歌と聞けば読まないうちからすでにいいものと思ひ込んでしまうようです。私自身も昔はその仲間の一でした。今から振り返ってみれば、赤面してしまふほどです。御歌所と言ってもえらい人が集まるわけではなく、御歌所長と言っても必ずしも第一流の人が座っているわけではありません。今のこの時代は、歌よみと値するほどの者は皆無と見受けられますが、それでも御歌所の人々より上手な歌よみは民間に必ずいます。田舎の者が元勳を崇拜し、大臣を偉い者に思い、政治上の力量も識見も元勳、大臣が一番に位置すると信じ込んでいる結果、新聞記者などが大臣を誹るのを見て、「いくら新聞屋が法螺を吹いても、大臣は天皇が信頼する地位の者、新聞屋は素寒

洒落を並べたがる半可通と同じで、御当人は大得意ですが、はたから見れば品の悪いことはおびただしいものです。縁語に技巧を弄するよりは、真率にストレートに詠んでいくほうが上品に見えるでしょう。

正岡子規



歌というと、決まって言葉の議論が出てくるのは困るものです。「ぼたん」と言わず「ふかみぐさ」と詠むのが正当であるとか、この詞はこうは言わない、必ずこういうしきたりであるなどと言う人がおりますが、それは根本においてすでに私の考えと異なっているものです。私の考えは、古人の言ったとおりには言おうとするのではなく、しきたりに倣おうとするのではなく、ただ自分が美しいと感じた趣をなるべくよく他者にもわかるように表すのが、本来の主意であるのです。ゆえに俗語を用いたほうがその美感を表すのに適していると思えば、雅語を捨てて俗語を用いるべきでしょう。また古来のしきたりの通りに詠むこともあるでしょうが、それはしきたりなるがゆえにそれを守ったのではなく、そのほうが美感を表すのに適しているからそれを用いたにすぎません。古人のしきたりなどと言うものの、その古人自身

貧、月とスッポンほどの違いだ」などと罵ります。しかし少し眼のある者は、元勳がどれくらい無能力かということと、大臣は回り持ちで、新聞記者から大臣になった者もあることくらいは承知していて、説き聞かせるのですが、田舎の人たちはいっこうにわからず、あいかわらず元勳を崇拜し続けるのも腹立たしいことではあります。あれほど民間でやかましく言う政治の上でもそうであるのですから、今まで隠居してきた歌社会に老人崇拜の田舎者が多いのも無理のないことではあるのですが、この老人崇拜の弊害を改めないと、歌は進歩することができないでしょう。

歌は平等で差別というものがありません。歌の上では、老若も、貴賤もありません。歌を詠もうとする少年がいたら、老人などにかまわず、勝手に歌を詠むのがいいです。と、お伝えください。明治の漢詩壇が振るっているのは、老人をそっちのけにして青年の詩人が出たゆえです。俳句の観が改まったのも、月並みの連中にかまわずに思う通りを述べた結果にほかなりません。

縁語を多く用いるのは、和歌の弊害で、縁語も場合によっては良い結果を生みますが、普通には縁語、掛け合わせなどがあると、それがために歌の趣を損ねることになります。たとえ良い結果になったとしても、この種の美といふものは、美の中でも下等なものでありましよう。むやみに縁語を入れたがる歌よみは、むやみに語呂合わせや駄

は、自分が新たに用いたということが多いのです。

牡丹と深見草との区別に言及すると、私には深見草というよりも牡丹という方が牡丹のイメージが早くはつきりと浮かびます。かつ「ぼたん」という音のほうが強いので、実際の牡丹の花の大きく凛としたところがよく伝わります。ゆえに客観的に牡丹の美を表そうとするなら、牡丹と詠むのがよい場合が多いでしょう。

新奇なことを詠めと言うと、汽車、鉄道などいわゆる文明の器械を持ち出す人がおりますが、考えが大いにまちがっています。文明の器械は風流でないものが多く、歌に入りにくいものです。もしこれを詠もうとするならば、他に趣深いものと組み合わせるほかにありません。何も組み合わせるものもなく「レールの上に風が吹く」などとやられては、殺風景の極みです。せめて「レールの傍らに重が咲いているよ」とか、または「汽車の過ぎた後に罌粟が散る」とか、「薄がそよぐ」とかのように、他のものを組み合わせ、配置すると、いくらかよくなります。また殺風景なものは、遠望するほうがよく見えます。「菜の花の向こうに汽車が見える」とか、「夏草の野末を汽車が走る」とかのようなものも、殺風景を消す手段かと思われまます。

いろいろ言いたいままに、取り集めて申し上げました。いつかもっと詳しく申し上げる機会もありましよう。

（明治三十一年三月四日）

一年前のこの短歌批評でとり上げた朝日新聞日曜歌壇の短歌をもう一度いくつか挙げてみる。すべて選者☆印の推挙短歌である。

カモミールティーを包み込むときの手よまだ愛があるじゃないか
ハロウィンの帰りにママと手をつなぐ幸せそうなら歳のゾンビ

貴婦人のような心で行きました人生初のアフターヌーンティー

品薄のどんぐり求め買い出しに行ったつもりの母親の熊

どれも情緒も趣きも興行もなく、現実を表層的に拘った小学生レベルの歌である。今回はそれに今年十二月一日付の最新の同じ歌壇の推挙歌を加えてみる。選者は同じ、馬場あき子、佐々木幸綱、高野公彦、永田和宏である。

「妹はおなかに居たの」と姉と言う戦死の父持つ同士の哀れ

この歌は、一見戦争のことを振り返って、運命的な嘆き

で、そこに込められた情緒や趣きは何もない。こういう驚きはニュースや知識としておもしろくはあっても、そのあと何も残らない一時の感興にすぎない。歌にする必要のない、口で伝えればいいものである。

弟がマジックをする日曜日「ですます調」が開始の合図

この歌も、手品をするのに、舞台用の言葉に変わるといっだけの、歌にするに値しない家庭内エピソードである。

一年前のものと合わせて変わらないこれらの歌には、何か決定的なものが欠けている。発見や小さな驚きはあっても、多くの人と共有する生きることや命への感動がない。生命や、命の根への肉薄が感じられない。生きるということとはこの程度のことなのか、感じるということはこのように浅いものなのか、いったいどういう自覚で生きているのか、どういふものを世界だと感じて呼吸しているのか、浅さだけが漂っている。現代の生活の一面を象徴している。こどもダメな歌、浅薄な歌ばかりが並んで現代短歌の表通りを闊歩していることを見るとき、なぜこうなるのか、考えざるをえない。

この週の朝日歌壇の中に、一首だけはいいものがあつた。新彙の敷かれし牛舎喜びの牛の動きで匂ひふくらむ

を組み入れているように見えるが、よく読むと何の感興もない皮相歌に過ぎない。なぜなら、戦争中に妊娠して、出征した夫が戦死した女性は、何十万人もいただろうし、その運命に堪え、乗り越えて生きた人々が、戦後の時代の一部をつくったことを考えると、「同士の哀れ」は大袈裟の感がある。むしろ戦後それを乗り越えた労苦にこそ味が出るはずで、そこを詠まなければほんとうの広がりは得られないだろう。逆に戦争という運命を、この程度にしか受け止められないのか、と大いに不満が残る。

姉と外で飲むのもいいな特別で大事な話もあるらしいから

遺産相続や結婚・離婚などをつい想像してしまう「特別で大事な話」だが、これにはふだんはうちとけて話をしない関係が潜んでいる。多忙のため形式的な現代の肉親の関係をよく表していて、それに鉄を入れる小さな転機は感じられるものの、返し刀で「普段からもっと親密に付き合っていればいいのに。希薄な姉妹」と揶揄されると、返答に窮する立場の弱点を露呈している。

葉書代八十五円になりたれど昭和基地でも同額うれし

これは南極でも八十五円で届くという発見と驚きが主眼

新しい彙の感興に包まれて喜ぶ牛たちの息遣いが伝わってきて、生き物の体温が溢れている。生きたい歌はこれ一首だったが、これが入っているところを見ると、集まってくる歌の中には、ひどい歌ばかりではなく、いい歌もあり、それがむしろ落とされていることも考えられる。これはやはり選ぶ方に問題があるということになる。☆印の歌がどれもダメなところを見ると、全体に選者にその責任があることは当然考えられる。しかしもし、集まってくるもののほとんどが、今回挙げた駄作のようなものばかりなら、むしろ作歌の根本的状況にも少しは言及すべきだろう。

投稿者のほとんどは、都会生活者のように見受けられる。現代の都市生活は、水道・ガス・電気・冷暖房・バス・トイレとすべてが完備していて、快適な生活状況にある。またマンシヨンのような壁に囲まれた生活では、自然との直接的接触は限定的になっていく傾向にある。さらに、忙しくスケジュールに追われる機能優先の日常のなかでは、いつそう自然と体感的に接触する時間や契機は少なくなっていくだろう。それらの実感の喪失が、このような口先だけの言語表現となっていることは、よく考えてみれば、精神の危機的な状況と言わざるをえない。思考や感受の基盤そのものが、劣化し、腐蝕しつつある。こういうものの上でどういう文化が成り立っていくのか危惧せざるをえない。